

経営者への活きた言葉

日本は世界の変化についていけなかった 野口 悠紀雄(早稲田大学ファイナンス総合研究所 顧問)

1. 世界的著作権機関(WIPO)が今年7月に発表した「世界141ヶ国・地域の技術革新力」に関する調査報告書によると、日本は25位だった。1位はスイスで、スウェーデン、シンガポールがそれに続く。一方、スイス・ローザンヌの国際経営開発研究所(IMO)が作成する「世界競争力ランキング」がある。今年5月に公表された2012年版では、日本は27位となった。1位は香港で、2位アメリカ、3位スイスと続く。このランキングが初めて作られたのは1989年で、そのとき、日本は首位で、アメリカは3位だった。
2. 日本人の多くは、これらのランキングに違和感を覚えるだろう。ことに、「香港、シンガポール、北欧諸国が日本より上」というのは、日本人の感覚では、なかなか理解できない。日本人の評価の基礎に、「自動車産業、製鉄業、高速鉄道などがない国は、産業国家と言えない。一流の産業国とは、それに加え飛行機や宇宙ロケットを生産できる国」との考えがあるからだ。この基準に照らして言えばシンガポールや香港は論外である。
3. しかし、実は、自動車産業や製鉄業があることが問題なのだ。ランキングの上位には、このどちらも持たない国が多い。1990年代に世界は大きく変化した。技術の性格が変わり、ITが重要になった。製鉄や電機製造は、新興国でもできる活動になった。日本の製造業の経営者は「技術は強いが、円高や法人税が問題」と言っていたが、この大変化に日本はついていけなかった。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2012年11月3日号)

経営者のための社会学

33年前の水準に戻った

1. サラリーマンの1回当たりの昼食代が2012年は510円となり、33年前(1979年)の565円とほぼ同水準の500円台に戻ったことがわかった。1992年に746円とピークをつけたが、その後3分の2近くまで減ったことになる。
2. 1回当たりの飲み代も2012年は2860円で、ピーク時の2001年の6160円から半減した。飲みに行く回数は、1999年1カ月6.0回だったのが2012年2.4回まで低下。家飲みが定着した。また、1カ月の小遣い総額は、2012年3万9756円で、ピーク時の1990年の7万7725円からこちらも30年前と同水準に戻った。

(参考:「週刊東洋経済」2012年10月20日号)